神のことばに生かされる　　マタイ 4:1-4

今日の「人はパンだけで生きるのではない」ということばは多くの人に知られています。昔、アメリカのあるジャムの会社が、ジャムの包装ラベルに「人はパンだけで生きるのではない」と書きました。それは「パンだけでなく、わが社のジャムもつけてお召し上がりください」とアピールしたわけです。商魂たくましいと言おうか宣伝効果は抜群だったそうです。

もちろん、聖書は「パンだけでなくジャムも必要」と言う意味ではありませんね。イエスは、このことばに続いて「神の口から出る一つ一つのことばによる」と言っておられます。人を生かすのは「神のことば」だと言われたのです。多くの人は、自分は神のことばで生きているわけではないと考えています。日曜日に教会に行って説教を聞いたり、聖書を読めばためにはなるだろうが、そうしなかったからといって生活にさしさわりがあるわけではない、まして、命にかかわることではないと思っています。しかし、主イエスは「人を生かしているのは神のことばである」と言っておられます。主イエスは、どういう意味でそうおっしゃたのでしょうか。

１．すべては神のことばによって成り立っています。

まず最初に世界のあらゆるものが神のことばによって生かされているということを考えてみましょう。神のことばが、世界を創造し、それを支え、それを生かしているのです。創世記を読むとそのことが分かります。神が「光があれ。」と言われると、光ができました。「大空よあれ」と命じられると大空ができました。「かわいた所が現われよ」と言われると、陸地が現れました。また「天の大空で光る物となり、地上を照らせ。」と命じられると、太陽、月、星がその役割を果たすようになりました。

神は世界を形造ってから、そこを命あるもので満たされました。神が「地が植物、すなわち種を生じる草やその中に種がある実を結ぶ果樹を、・・芽ばえさせよ。」と命じられると、陸地に草花、樹木など、あらゆる植物が生じました。「水には生き物が群がれ。鳥が地の上、天の大空を飛べ。」と命じられると、海や川、湖に魚が泳ぎまわり、空には鳥が飛ぶようになりました。さらに、神は「地が、種類にしたがって、生き物を生ぜよ。」と命じ、あらゆる動物を造られました。世界は神のことばによって造られ、植物も動物も神のことばによって命を与えられたのです。聖書はすべての創造のわざは「神は仰せられた」ということばの結果として生まれています。

あらゆるものを造られた神は、最後に人を造られました。神が人をお造りになるときには、たんに「人よあれ」とはおっしゃらず、「われわれのかたちとして、われわれに似せて人を造ろう」と言われました。神は、人を他の生き物とは違った、特別なものとして、心を込め、愛を注いでお造りになったのです。しかも、神は、その愛の心、愛の思いをことばに出して、人を造られました。人も、神のことばによって造られたのです。

古代の人々は世界の起源について、さまざまに考えました。ギリシャの人々はギリシャ神話の神アトラスが天空を支えていると考え、インドの人々はゾウが地面を支えていると考えました。日本神話ではイザナギ（男神）とイザナミ（女神）が兄弟なんだけれども夫婦となって島々や人々を生み出したということになっています。しかし、聖書は世界を支えているのは神のことばだと教えています。詩篇 33:6 に「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。」とあります。ヘブル 11:3 には「信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。」とあります。

「くちから出たことばだけでは信用できない」という考え方があります。それで「くち約束はあてにな

らないから、証文を書いてくれ」ということになるのです。しかし、聖書では、たとえそれが文字にならなくても、くちから出たことばには、重みがあり力があるとされています。ことばはくちから出て、空中に消えていくのではなく、物事に働きかけて結果をもたらします。例えば、どんなにすごい馬力の車に乗っていても、交通警官が「ちょっと、横に止まりなさい」と言えば、すぐに止まります。心ないことばが矢のように人の心を突き刺して、長い期間苦しむこともあれば、ひとことの温かいことばで傷ついた心が癒やされ元気が出てくることもあります。

人間のことばですら、そんな力を持っているとしたら、神のことばはなおのことです。イザヤ 55:10-11 にこうあります。「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」雨や雪が降り、地を潤し、地に実りをもたらし、人にパンを与えます。しかし、天に命じて雨を降らせ、地に命じて実を結ばせているのは、じつは、神のことばなのです。人間には、ことばだけで物を造り、命を生み出す力はありません。人間は意志したことを体を使って行わなければ、何も作り出せませんが、神の場合、そのご意志はことばによって実行されるのです。

ですから人は、大地の実りを収穫し、それを脱穀し、臼でひいて粉にし、その粉を焼いてパンを作るのですが、それらすべての背後に神のことばがあるのです。神のことばによって、はじめてわたしたちはパンをくちにすることができるのです。主イエスが「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」と言われたのは、こうしたことなのです。神のことばがすべてを造り、すべてを生かし、すべてを支えています。わたしたちの一日三度の食事も、じつは神のことばによって備えられているのです。 わたしたちは神のことばによって生かされているのです。

２．神のことばは私たちを生かします。

わたしたちは、神のことばによって生かされ、生きているのですが、「生きる」といっても「たくましく生きる」、「上手に生きる」、「より良く生きる」といったレベルがあります。「たくましく生きる」ということでは、動物たちはどんな環境の中でもじつに、たくましく生き抜いています。それに比べれば、人間はひ弱です。冷房や暖房なしには暑さにも寒さにも耐えられません。精神的にも、いつも心配したり、思い患ったり、失望したり、落胆したりしています。わたしたちは動物たちから「たくましく生きる」ことを教えてもらわなければならないかもしれません。

「上手に生きる」というのは、少し知恵のある動物でもできます。チンパンジーに棒を与えると、それでバナナをたたき落として食べます。人間はもっと知恵があり、この分野では他の動物には負けません。しかし、あまりにも自分の知恵に頼ってしまい、そのために、結局は愚かな生き方をしてしまうことが多いのです。戦争によって科学技術が発達すると言われますが技術の進歩がほんとうに人をしあわせにしているかというとそのあたり良く考える必要がありますね。

神は人間に「たくましく生きる」、「うまく生きる」というだけでなく、「より良く生きる」というレベルの人生をお与えになりました。それは、パンを食べて体を生かすといった以上のものです。工夫をして生き延びることに勝るものです。人として価値ある生き方をするということ、神から与えられた目的や使命を発見してそれに向かって生きていくということです。しかし、人はそうしたことに心を向けることなく生きるようになりました。人は、罪を犯したとき、神を愛し、人を愛して生きるというレベルの命、霊的な命を失いました。そのため、神に背を向け、人を押しのけて生きるようになりました。もちろん普

通に生きることにおいては特別不自由を感じることはありません。しかし、自分が生きていることの意味や目的ということになると答えが見つからないまま生きているということが多いのではないでしょうか？お金はあっても豊かな心を持つことができません。快楽はあっても本物の喜びはありません。気休めはあっても動かない平安はないのです。それは魂の痛みであり問題です。神の目から見れば、からだは生きていても霊は死んでいるのです。

神は、そんなわたしたちを、新しく造りかえ、霊の命を与えて生まれ変わらせてくださいました。それは、もちろん、イエス・キリストにより、聖霊によってなのですが、同時に、神のことばによってです。第一ペテロ 1:23 は「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。」と言っています。神のことばは、人にパンを与えてからだの命を支えるだけではなく、人に霊の命を与え、人に神を愛し、他を愛して生きる、新しい命を与えるのです。それを「新しく生まれた」と言うのです。神のことばは創造の力ばかりでなく、再創造の力をも持っているのです。人が神に造られたものとして、ほんらいの人間として生きるには、神のことばが必要なのです。人は神のことばによって、はじめて、ほんとうの意味で「生きる」ことができるのです。

３．神のことばの力を体験しよう。

神のことばによって生まれた者は、神のことばによって成長します。第一ペテロ 2:2 に「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と書かれています。神のことばによって生まれた者は、神のことばを食べ、飲んで成長します。ここには、赤ちゃんがミルクを求めて、泣き叫ぶように、わたしたちも神のことばを熱心に求めなさいと、教えられているのです。

しかし、現代は、神のことばを求めることに熱心でなくなりました。まず現代は本や活字に対してあまり取り組まないようになってきています。教会もまた、ことば対してアレルギーと言おうか拒否反応が出てきています。昔は聖書研究会、いわゆる聖研は教会でもどこでもよく聞くことばでした。今はなかなか人気がありません。ファーストフードのお店は「速い、安い、うまい」がそろっていないといけないと聞いたことがありますが教会も「速い―それは説教や話が短い。安い―献金を初めあまりお金をかけないこと。そしてうまい―これは楽しい催しとか興味深いことを聞ける」と言えばよいのでしょうか、そんな風になってきているように思います。批判しているわけではなく、何といっても、いつお時代でもわたしたちの霊の命を支えるのは、なんといっても神のことばだということです。

アモス 8:11 に「その日、わたしは、この地にききんを送る。パンのききんではない。水に渇くのでもない。実に、主のことばを聞くことのききんである。」ということばがあります。聖書は教会で神のことばが神のことばとして語られ、聞かれていないならその結果、わたしたちは霊的な栄養失調に陥り、霊的な力を失うというのです。詩篇 119:50 に「これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします」とあります。

神のことばを聞くたびに、神のことばをきくたびに「神のことばによって生かされている」ことを確認しましょう。そして「神のことばによって生きる」ことができますようにと、祈り求めましょう。そのようにして、「人は…神の口から出る一つ一つのことば」によって生かされていることを体験してゆきましょう。